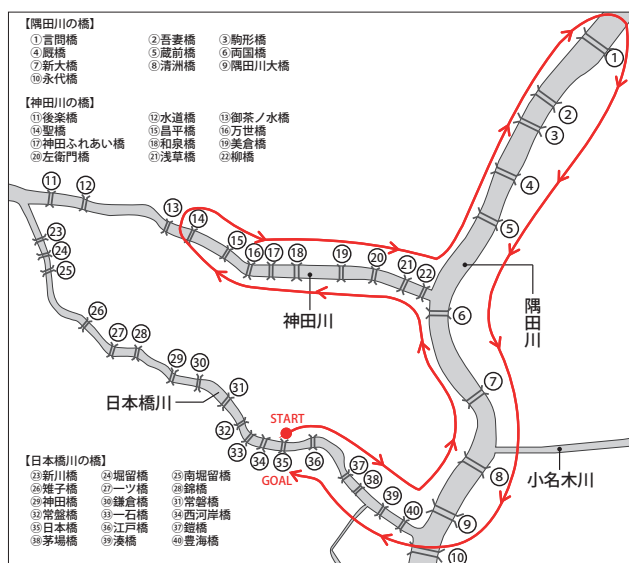


日本橋川・隅田川・神田川 橋梁見学クルーズを開催

技士会は、10月22日、一般の方向けに土木施設や技術の重要性を感じていただくための見学会として「日本橋・隅田川・神田川橋梁見学クルーズ」を開催しました。

約40名が参加。川や河岸の歴史から橋の見どころ、さらには都市整備まで幅広い解説で、東京の様々な側面を感じる見学会となりました。



見学ルート

■水上から江戸・東京の歴史に触れる

見学ルートとなる日本橋川・隅田川・神田川は、日本各地から江戸へ集まる物資を受け入れ、市中各地へと運ぶ重要な水上交通網として、物流面で大きな役割を担っていました。水上交通網としての役割を終えた今でも岸壁の石積みや屋形船の船宿などに往時の面影を残しています。関東大震災からの復興で架けられた数々の橋梁、高度経済成長期にできあがった首都高など、江戸以降の東京の近代化を間近に感じられる場所でもあります。

今回の見学会は、法政大学大学院エコ地域デザイン研究所研究員であり、建築家・環境都市プランナーの阿部彰先生を解説者としてお招きしました。解説は川や河岸の歴史から橋の見どころ、さ

らには江戸の都市整備までと幅広く、川から東京の様々な側面を感じるクルーズとなりました。

■日本橋の船着場から出船！

当日は日本橋のたもとにある船着場からチャーター船（かわせみ）で出発。日本橋川から隅田川を經由し、神田川へと向かいます。あいにくの曇り空でしたが、集まった参加者は総勢40人。まずは日本橋と首都高の交差を下から見上げるというダイナミックな光景に目を奪われる参加者たち。船に乗り込むとカメラを手に早速撮影が始まりました。

日本橋川を東へ進むと、右手に現れたのが霊岸島。この付近は大阪からの廻船が物資を荷揚げした場所です。物資は上方（大阪）からの「下がりもの」と呼ばれたそうです。まさに江戸時代の物流拠点といえる、重要な場所でした。

■水害で江戸の橋を流した隅田川

豊海橋をくぐり、船は隅田川へと入ります。江戸時代、隅田川には千住大橋、吾妻橋、両国橋、永代橋、新大橋が架けられていましたが、橋は木で作られていたため、何度も水害で流されてしまったそうです。今ある吾妻橋、両国橋、永代橋は関東大震災の復興の際につくられたもの。この時期の橋は、リベット（鉄の釘）を使って造られています。完成後、約90年が経ちますが、現役として利用されています。現在、耐震化あるいは長寿命化といった工事が順次進められているようです。

先生のお話では、橋を見ると、その橋がつくられた時代が見えてくるとのこと。川を上流にさかのぼると、首都高が再び出現。そこには昭和50年代の高度成長期の建設技術の跡がうかがえます。

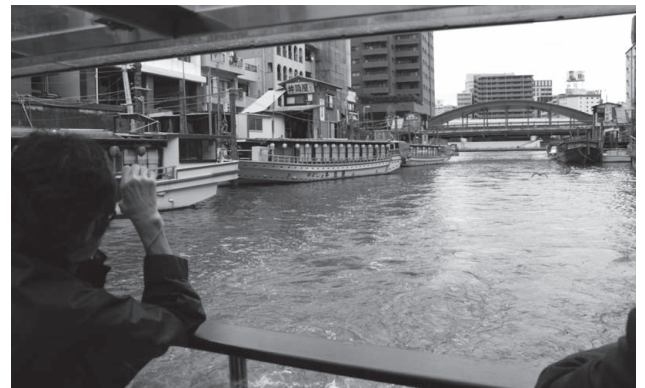


両国橋

■神田川は伊達政宗が掘った堀

両国橋を越え、神田川へ。この川、実は人の手でつくられた人工の堀なんだそう。江戸の防備を固めるために徳川秀忠が伊達政宗に命じてつくらせたんです。江戸の神田川では兩岸に番所や船宿が並んでいました。現在でも多くの船宿があり、小さな釣り船や屋形船が係留されています。

さらに進むと御茶ノ水に到着。個性的なアーチをした聖橋が登場。その先では御茶ノ水駅の改良工事による護岸の補強が進んでいました。江戸の堀と現代の土木のコラボレーションが進んでいます。



屋形船が並ぶ神田川

■スカイツリーとの共演

船は御茶ノ水の聖橋でUターン。再び隅田川に戻り、浅草まで遡上^{そじょう}した後、日本橋川へと戻ります。途中、清洲橋とスカイツリーと一緒に見えるポイントで停船し、新旧建造物の共演を堪能。普段見ることのできない視点から川や橋、江戸・東京の移り変わりを学ぶ貴重な見学会となりました。

参加された方々から「大変すばらしい見学会でした」という言葉とともに「橋梁の維持管理の重要性を再確認しました」という内容の意見が多く寄せられました。



清洲橋の先にそびえる東京スカイツリー



「まちづくり展2013」を開催

期 間：9月25日(水)～27日(金)

会 場：新宿駅西口広場イベントコーナー

技士会では、都民の安全・安心を守る社会資本整備の重要性と今後のまちづくりへの取り組みなどを紹介し、これらを支える建設業の技術と役割について、理解促進とイメージアップを図るため、毎年、東京建設業協会（以後、東建）との共催で、新宿駅西口広場イベントコーナーにて「まちづくり展」を開催しています。

今年は、「建設の技術紹介」「まちづくりへの取り組み」をテーマに開催し、技士会・東建の会員企業22社より出展いただいた模型やパネルなどを展示しました。

また、後援をいただいたスポーツ祭東京2013実行委員会より、東京国体のマスコットキャラクター「ゆりーと」にも登場してもらい集客に役

かっていただいたり、建設系の大学生や高校生が日頃の研究や実習の成果を発表するための映像、パネルなどの趣向を凝らした展示や東建が主催している建設系高校生作品コンペティションの昨年の入賞作品を展示する「学生コーナー」を設けました。

このほか、エントランスには、「お茶室コーナー」を設けたり、来場者が無料で相談できる建設総合相談コーナーも開設しました。

また、会期中は、3日間で12,000人と大変多くの方々にご来場いただき、「改めて耐震対策の仕方を学べてよかった」や「これらの展示品を活用して1日も早く復興が進めばいいと思います」などの感想をいただきました。



オープニングセレモニー



会場風景



大人気の「ゆりーと」



会場風景



会場風景

■ 展示テーマ ■

建設技術の紹介・ まちづくりへの取り組み

主催者会員企業や関係する様々な団体
が行っている取り組みを紹介しました。

■ 展示コーナー ■

オジギビットパネル展

工事現場の看板に描かれたキャラク
ター（オジギビット）を集め、ユーモアあ
ふれるコメントとともに紹介しました。

スポーツ祭東京2013

東京で開催された「第68回国民体育
大会」などの情報を紹介しました。

建設総合相談コーナー

住宅の新築・増築・耐震補強・バリア
フリー化などに関する無料相談を行いま
した。

「わくわくすいすいKidsクラブ」活動 「水辺探検隊」を後援

技士会では、昨年度に引き続き、「わくわくすいすいKidsクラブ」中央水辺実行委員会（阿部彰委員長）が主催する、「水辺探検隊」の活動を後援しました。この活動は、都心で育った子供たちに、江戸時代から受け継がれる豊かな東京の水辺に親しんでもらい、ふるさとも感じてもらうことで、未来のまちづくりに参画してほしい、との願いを託して行われたものです。

昨年度は、中央区の小中学生を対象としていましたが、今年度は都心3区（中央区・千代田区・港区）の小学校に参加を呼びかけ、中央区から中央区立月島第三小学校と中央区立京橋築地小学校、港区から港区立麻布小学校の計3校の小学生とその保護者、65名が参加しました。広く一般への土木をはじめとした建設業への理解促進のため、子どもたちやその保護者に広報する良い機会となりました。

イベントは、8月3日、10日、24日の3回に分けて学校ごとに開催されました。実行委員会のボランティアのほか、日本大学「土木女子の会」や千葉大学工学部の、土木を学ぶ学生たちがサポーターとして参画。午前中は、日本橋の船着き場から船に乗って隅田川へと下り、橋や構造物を見学しながら、都心の水辺に親しみました。参加者は、普段は目にするものがない橋の裏側を熱心に眺め、川や橋、周辺の歴史などの説明に耳を傾けていました。江東区の小名木川に設置された「扇橋閘門」では、船に乗りながら2メートルの水位差を体感し、夏休みの思い出づくりとともに、土木の重要性や役割に触れる、貴重な経験となりました。

午後はワークショップを開催し、クルーズで見聞きして印象に残った橋や建物、風景などを思い思いにTシャツに絵を描く作品づくりを行いました。



ワークショップでは、グループに分かれて学生サポーターなどからアドバイスをもらいながら作品づくり

た。Tシャツづくりが終わると、最後に発表会を行い、子どもたち一人ひとりが自分の作品にこめた思いを発表しました。

また、当会からは、昨年度に引き続き「情報・広報グループ」(大島正康グループ長(清水建設株))の協力を得て、清水建設の若手土木職員が「専門アドバイザー」として参加しました。クルーズ中には参加者の土木に関するさまざまな質問に答えるとともに、ワークショップでは作品づくりの助言などを行いました。活動を通して、参加した子どもたちと保護者に、建設業に対する理解を楽しみながら深めてもらいました。

なお、子どもたちの作品展示会は11月3日と4日に、晴海トリトンスクエア「ノーストリトンパーク」で開かれました。



扇橋閘門では水位差を体感



発表会ではみんなの前で自分の作品を堂々と発表



自分で描いたTシャツを着て、最後は参加者全員で記念撮影